

平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

1. 学校概要

学校名 京都市立紫野高等学校 (※正式名称を記載)
種 別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫^{※注1}
 中学校 中高一貫^{※注2} 高等学校
 教員養成大学 専修学校、各種学校
 特別支援学校
 その他 (例: 小中高一貫)
※注1 義務教育学校を含む ※注2 中等教育学校を含む

所在地 〒603-8231
京都市北区紫野大徳寺町2-2

E-mail murasaki@edu.city.kyoto.jp

Website http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index.php?id=300803

幼児児童生徒数 男子 名 女子 名 合計 名
幼児・児童・生徒の年齢 15歳～18歳

2. 報告期間

平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月

※報告書提出時点～平成 30 年 3 月末までの活動は、予定 (見込み) として記載ください。

3. 活動内容

※記入にあたっては、末尾の留意事項も確認ください。

(1) 活動の概要 (800 字程度+活動内容を表す写真数枚)

※チェック事項 1-1、2-1 に対応

本校は、「自由と規律」「知性と創造」「参加と協力」を校是とし、これをもとに「21 世紀を自分で歩く国際人」を育成するという教育理念を掲げている。

持続可能な社会の構築の理念を理解し、地域・国・世界の現状を把握し、総合的な学習の時間を通しての論理的思考力やコミュニケーション力の育成を目標とした。

具体的には、総合的な学習の時間を柱に、①異文化理解に係わる活動、②減災・防災に係わる教育、③持続可能な未来に係わる学習を行った。

① 異文化理解に係わる活動

本校では、総合的な学習の時間を「むらさきの Global Action Program」と位置付け、持続可能な社会の構築のために授業を進めてきた。具体的には、夏までに SD の理念を理解し、「持続可能な社会に向けて私にできること」をテーマに 800 字のレポートを書いた。

また、確立したSDの概念をベースに、グループで異文化比較を行った。本校の普通科は1年の3月にマレーシアへの研修旅行を控えているため、日本文化とマレーシア文化を比較し、現地フィールドワークを通して異文化を理解するとともに、自分化への深い関心を養った。

②減災・防災に係わる教育

「減災・防災」の授業では、すべての人に必要な「当事者意識」（＝自らの問題として捉える意識＝状況を判断し、最善を尽くすために主体的に行動する意識）を涵養し、それを基礎とした地域貢献へつなげるとともに、現代社会の課題（SDGs）の解決に寄与する市民の育成を目指して行った。

防災クロスロードにて災害時に直面するジレンマを疑似体験することで、当事者意識を養い、校内の避難経路マップの見直しをフィールドワークを通して行った。さらに、地域の人々と協働で防災グッズを実際に使うことで、自助の面だけでなく共助の面で交流を行い、地域で率先してリーダーシップをとって判断・行動する力を涵養した。

② 持続可能な未来に係わる学習

2年生の総合的な学習の時間では「むらさきのGAP 2nd」という授業をおき「2050年から現在への提言」というテーマで、探究活動を行った。そのトレーニングとして、現在から1964年の人への提言を行い、当時の人々が目指した“未来”がどのようなものになり、何に気を付ける必要があるのかを考え、提言した。それを踏まえて、2050年がどのような社会になるか具体的に想像し、社会にどのような影響を与えるか、グループで考えた。AIの発達や自動運転、医療の発達などが社会をどのように変え、自分たちの生活をどのように変えるか具体的に考えた上で、想像した2050年から現在の自分たちに向けて提言をした。それをポスターにまとめ、校内発表を行った。



①マレーシアホームステイ



②防災グッズの使用



②避難経路フィールドワーク



④発表「2050年からの提言」

(2) 活動の詳細

① 活動内容

※チェック事項 1-2, 2-1 に対応

ア. 活動分野 (複数選択可)

<input type="checkbox"/> 1. 環境	<input type="checkbox"/> 2. エネルギー	<input checked="" type="checkbox"/> 3. 防災	<input type="checkbox"/> 4. 生物多様性
<input type="checkbox"/> 5. 気候変動	<input checked="" type="checkbox"/> 6. 国際理解、文化多様性	<input checked="" type="checkbox"/> 7. 地域の伝統文化、文化遺産	<input type="checkbox"/> 8. 人権・平和
<input type="checkbox"/> 9. 健康・福祉	<input type="checkbox"/> 10. 食育	<input type="checkbox"/> 11. 持続可能な生産と消費	<input type="checkbox"/> 12. 貧困
<input type="checkbox"/> 13. エコパーク	<input type="checkbox"/> 14. ジオパーク	<input type="checkbox"/> 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
<input type="checkbox"/> 16. ジェンダー平等	<input type="checkbox"/> 17. その他()		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力 (複数選択可)

<input type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input checked="" type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input type="checkbox"/> 8. その他(自由記入)	

ウ. 活動時間 (複数選択可)

<input type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input type="checkbox"/> 5. その他(自由記述)	

エ. 使用した教材 (書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名)

<ul style="list-style-type: none">・ 世界一大きな授業・ 自作教材

- ② ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。（200～300字程度）

※チェック事項 1-2, 1-3 に対応

本校では、「21 世紀を自分で歩く国際人」の育成を教育目標とし、総合的な学習の時間や各教科にて、その目標をユネスコスクールとしての活動を通して達成しようとしている。

ここで言う国際人とは、単純に国外に出るだけでなく、多様な人々とのコミュニケーションに窮屈を感じずに、地域・国・地球のために考え、判断し、表現・行動できる人物であると言える。

ユネスコスクールの理念である「持続可能な社会の構築」を目指すために自分たちに何ができるかを論理的に考える力を身につけ、表現する資質を総合的な学習の時間で養う。ユネスコスクールとしての活動は、生徒たちの基礎的な汎用的能力の育成と、世界の諸課題への解決の切り口として位置付けている。

- ③ 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。（200字程度）

※チェック事項 1-4 に対応

学校全体でSDの理念を理解するために、企画部の研究担当で授業を組立て、担任の先生や教科担当の先生方に伝えて授業者として授業をこなす体制を作っている。

一部の教員だけが総合的な学習の時間でSDを理解するのではなく、企画部発信で、全教職員に授業や研修会を通して理解するように工夫している。総合的な学習の時間に関わる教職員は、約 25 名で、来年度は 30 名以上の教員に関わらせる予定である。

- ④ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。（200字程度）

※チェック事項 1-5 に対応

活動の評価方法としては、1 年の授業後に生徒へのアンケートを行ったり、校内での発表を通して、先生方や外部の人たちからフィードバックを頂いている。

成果としては、生徒たちにSDの視点をつけて海外研修に行くことで、観光だけでなく、研修としての役割を担えたこと。一方課題としては、「持続可能な社会」のために“自分”に何ができるかとしっかり深くまで考え込めていなく、“自分たち”という視点でしか見れない生徒も多かった。

- ⑤ ESD の推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。(200字程度) ※チェック事項 2-2 に対応

SDの発信としては、減災・防災授業での地域との連携をはじめ、校内での大々的な発表会、またはホームページでの周知や1年間の活動報告冊子の作成などで行っている。

- ⑥ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成(地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など)
(200字程度) ※チェック事項 2-3 に対応

学校以外の団体との協働・交流としては、地域の人たちとの連携授業や、高大連携による留学生などとの交流が行われた。

地域の人たちとは、もし災害によって避難所で一緒になった場合、防災グッズを協働で使用して「共助」の視点で動く力を身につけさせるために行った。

また、高大連携としては、ユネスコ文化遺産にもあげられる上賀茂神社で留学生とグループワークを通して異文化理解を深めた。

- ⑦ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成(200字程度) ※チェック事項 2-4 に対応

国内の交流としては、本校と京都外大西高校・京都府立嵯峨野高等学校・平安女学院高等学校・京田辺シュタイナー学校・一燈園といった京都府下のユネスコスクールで上賀茂神社を舞台に1日のワークショップを行った。

また、宮城教育大学への視察によって、ユネスコスクールとしての縦のつながり(高大連携)のノウハウの知見を得た。

国外との繋がりでは、研修旅行先での学校連携などがあげられる。

- ⑧ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）（200字程度）
※チェック事項 2-5 に対応

ユネスコスクールの活動を通して、「持続可能な社会の構築」について深く理解することが最も大きな効果と考える。単に将来を考えて行動するだけなら、「環境問題」に特化してしまう。しかし、環境だけでなく、教育や福祉といった政策的な面や、パートナーシップやコミュニティといった対話力や主権者教育の面など、あらゆる切り口から「SD」を見ることができ。地域の大人や留学生など同質でない人たちとの交流で、多様な考え方を知って、SDと向き合うことができた。

- (3) 平成 30 年度の活動計画（200～400字程度）

平成 30 年度は本校の総合的な学習の時間を改編し、SDGs の課題解決へ取り組むこととしている。ただ、むやみにSDGsに取り組んでも、高校生の課題解決は陳腐なものになると懸念される。そのために、1 年生の間は、「SD の概念理解」「論理的な文章の書き方」「モラルジレンマ」「ディベート」「模擬国連」「紫野半径 500m（フィールドワークから課題設定）」といった 6 章をこなすことで、基礎的な汎用的能力を培うことを主眼としている。

1 年間で培った汎用的能力によって、研修旅行を経験し、2 年生では SDGs への探究活動を行うこととする。個人でレポート及びポスター発表によって外部発信を行うことで、地域との連携を深める、1 年半のプログラムを作成している。

その他、防災や上賀茂神社ワークショップなどは継続して行っていく予定である。